

『魂 忠魂碑』

道内戦没者の慰霊」について

柴田 幹雄 陸自75

礼文、利尻、天売、焼尻4島以外のすべての北海道の「忠魂碑」522基を実地に訪れて慰霊し、記録・撮影して、この度、写真集『魂 忠魂碑』が発刊された。発刊者は陸自75期の井上和夫氏である。以下井上氏の「はじめに」、「あとがき」の苦労話を引用しつつ紹介する。

北海道中の忠魂碑等の場所を調べ、自分一人で現地を訪問し確認していくことは容易なことではない。北海道は広い。札幌から函館までの距離は東京から仙台あるいは名古屋までの距離に匹敵する。面積で見ると東京・大阪・京都・新潟など15の都道府県の合計でも足りないほどである。

調査は、江別市にある道立図書館通いから始め、各自治体の市・町・村史の中に在郷人会や遺族会の活動、忠魂碑についての記述を探し、拾い集めた。中には記述がないものがあり現地に行つて、その土地の図書館や住民への聞き取りで調べた。フルタイムの仕事を持つ井上氏の調査はどうしても土日祝日となるが、自治体や社会福祉協

議会等の職員は休みのため苦労したという。しかし、道内179自治体すべての聞き取りは完全に行つている。

このような挑戦に彼を突き動かしたものは何だったのだろうか。本写真集の「はじめに」で、次のようにその思いを記している。

「私は、中学校卒業と同時に陸上自衛隊少年工科学校（現在は高等工科学校）に入校し、以来定年退職まで約40年間、主としてヘリコプターのパイロットとして勤務してきた。他の職種よりは危険度が高いこともあり、普段から殉職した場合の慰霊の在り方や部隊葬には高い関心を持っていた。制服を脱いで暫くして、殉職することのない自分に気付くと同時に、これまで自衛官の戦死者は、幸いなことに皆無だが、万が一戦死者が出た時には、一体どのようにその名誉を称え、霊を慰めるのか？ との疑問がわいてきた。

この疑問を解消するには過去に学ぶしかないと思われ、これまでの戦没者の慰霊の実態とその象徴である忠魂碑等をめぐる慰霊と調査の旅をすることとした。

北海道の各地における日清・日露戦役から大東亜戦争までの間に亡くなられた尊い御霊の慰霊はどのようにされてきたのか？ 現在、忠魂碑等の管理は一体誰が行っているのか？ 等々、

私には一日も早く道内すべての戦没者を慰霊することもに現状を調査しなければならぬとの思いが募り、行動を起こすことにしたのである」

尼港殉難碑

所在地 北海道釧路市
建立者 陸自75期
建立年 1975年
高さ 約1.5m
幅 約1.5m
材質 石材

本写真集にはそれぞれの碑の写真を載せ、その所在地、建立年月日、建立者、題字の揮毫者、合祀者数、慰霊祭、追悼式、現在の管理などを記している。



現在、忠魂碑等の維持・管理について、ほとんどの忠魂碑等は関係者の努力で良好に管理され、戦没者の尊い御霊は地域の人たちによって慰められている。しかし維持管理が難しく荒廃が進む忠魂碑などもある。現在の管理は、公園の一角にある碑は公園管理の一環として市などの自治体が行っているが、多くは護国神社などの神社が管理をしている。だが地域の産業が衰退し、少子高齢化で神社そのものの維持すらままならない現状もあるという。

井上氏は、筆者と同期であり、北方総監部で勤務した際は、氏はすでに退官しサッポロビール(株)に勤めていたが、温厚かつ静かな語り口で同期の信望も篤く面倒見の良い人柄で、同期生会などの調整でも随分助けてもらった。ビール拡販に大いに成果を上げられたようだが、さもありませんというところ。また前理事長富澤氏が北方総監の時の副官も務めている。その縁から富澤氏が本写真集に「発刊に寄せて」の一文を贈っている。当時の井上氏の献身に対する感謝と懐かしさを込めて、井上氏の人柄、仕事ぶりなどを述べ、「本写真集の発刊は、かつての伊能忠敬の日本地図作りとまでは言わぬとしても、これは大事業である。この大事業を井上氏になさしめた根源は『國の為、命を捧げた軍人（自衛官）への慰霊とは何か』という真摯な探求心で、私どもの所属する偕行社全員の追い求めるものである。本写真集は、

自費出版で、発行部数も少ないので多くの方に購入していただくことも難しいだろうが、道内各自治体・各自衛隊駐屯地の図書館において活用していただければ良いが、と希うところであると結んでいる。

頒価は2500円。希望者は井上氏 (prunedog@beige.plala.or.jp) まで